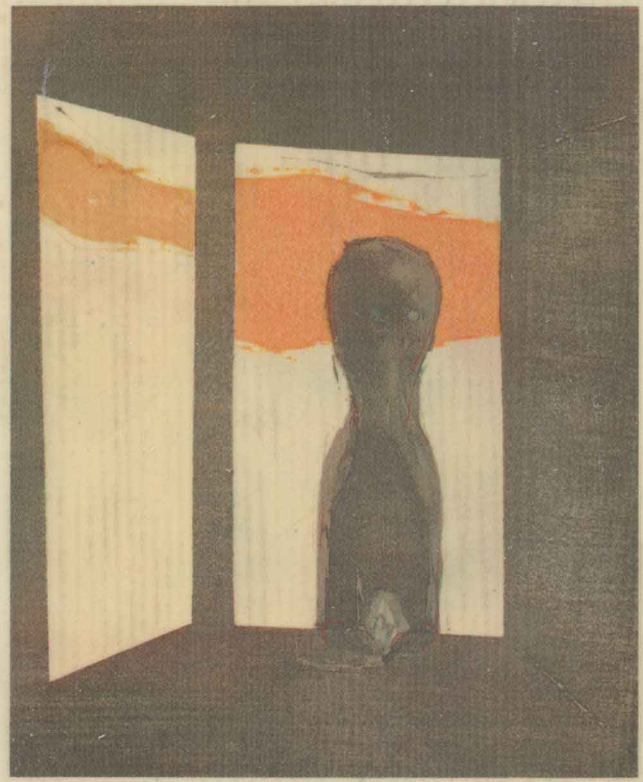
人間と愛と自由

石川達三



新潮文庫

新潮文庫

人間と愛と自由

石川達三著

新潮社版

目次

I

孤独……一〇
心の誇り……一一
宗教と共産主義に関して……一五
囚われた心……二〇
トルストイの宗教観……二七
群衆と孤独……三三
人間に二種あり……三六
死について……四三
原罪……四六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

Ⅱ

現代・速度について……五〇
沙漠・その他……五五
ユダヤの街……六三
聖地エルサレム……六八
牢獄・その他……七六

Ⅲ

結婚の幸福とその条件……九〇
愛の構図……九七
アダムとイヴ……一〇七
貞操とは利害関係である……一〇九
新しい太陽を……一二四
性の追求……一三七

生殖の美……二三〇
性の解放……二三五
恋愛喪失の時代……二三九
Ⅳ
教育について……一四八
〝国語〟に手を出すな……一五五
浪費教育……一六〇
教育のむずかしさ……一六九
愛国心の在り方について……一七四
「人間の壁」その後……一八〇
Ⅴ
時代への適応……一八六
人道主義……一九三

言論の自由について……一九五
日本的不合理……二〇四
汚い根性について……二一一
ニュースと生活……二一八
ヒューマニズムの終焉……二二六
今日のモラルへの疑問……二三六
心の中の戦争……二五六
変革の思想とは何か……二六七
「繁栄」の中の人間……二七七
後記……二八四

人間と愛と自由

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

孤　独

孤独を知らない者は愛情をも知らない。真の愛情は「心貧しきもの」に与えられる。孤独なる心からうまれ出でた愛情は、祈りの心にちかづく。孤独とは「渇ける心」である。

子供が重病で死にかかっているとき、親の心は深刻な孤独に沈む。そのとき彼は最も大きな愛情を感ずる。まさに祈りである。その子が死んだとき、対象を失った愛情はそのまま祈りの形をとる。

――芸術は孤独な心にのみ育つ。つまり「渇ける心」が芸術を発見するのだ。

（昭和二十二年四月）

心の誇り

パアル・バック女史の作品のなかに This proud heart と題する小説がある。（邦訳では〔この心の誇り〕となっているが〔誇り高き心〕とする方が妥当であろう）

この小説の中のスーザンという女性は天才的な彫刻家であるが、同じ芸術にたずさわる良人（おっと）の精神の低俗さにあきたらず、離婚して自分ひとりの道を歩む。彼女は決して男まさりの鼻っぱしの強い女性ではなく、むしろ甚（はなは）だ女性的な女性である。彼女がその結婚生活に耐え切れなかったのは、ただひとえに良人と妥協し得ない自分の心の矜持（きょうじ）の高さであった。

誇り高き心というのは、贅（おご）れる心ではない。贅れる心というのは、理由なしに高ぶっている態度である。誇り高き心はその誇りを支える沢山の理由があるのである。高き誇りを維持するためには、多くの正しい努力がなくてはならない。

多くの場合、学歴をもった女性は一種の誇りをもっている。それは学識を誇るのであって、自分自身を誇っているのではない。また、英国に十年居たとか米国に八年居たとかいう人は一種の誇りを持っている。それは外国語が話せるという能力を誇ったり経験を誇ったりするのであって、本当にその人自身を誇っているわけではない。しかしその二つの誇りが屢々（しばしば）混同されているようだ。

ここに私の言う誇りは心そのものの矜持の高さである。学識や経験ではない。中国の言葉で言えば「威武も屈する能わず、富貴も淫する能わず……」強権者の威嚇にも頭を下げず、財宝をもってたらしこむこともできないという、この心こそ誇り高き心である。自己を信じ自己を恃み屹然として自己をまっすぐに立て通している姿である。そこに精神の美しさと純粋さがある。戦後の日本に、殊に戦後の日本女性に望みたい態度はこれである。

シェイクスピアの名作「ロミオとジュリエット」のなかで、家来がしきりにそそのかす言葉をききながら、ロミオの歎く言葉がある。（あのジュリエットという娘は、おどかされて言うことを聞く女でもなく、黄金の前に前垂れをひろげる女でもない）という意味の名文句である。つまり簡単に手を出せる女ではないというのだ。

ジュリエットは容姿花の如くやさしく美しい楚々たる女性であるが、しかもなおそのような誇り高い心をもっていた。それがなければ彼女の美しさは三分の一にも減じたであろうし、またロミオも死を懸けて恋する気にもなれなかったに違いない。誇り高い心を失った女性は、たとい家庭の夫人であっても内容は巷の女に近い。誇り高き心とは、心の節操にあり心の純潔であり、心の貴族である。何人にも冒されぬ強健な心である。易々と心を冒される者は心の娼婦であろう。

岸田国士氏の作品のなかに（「双面神」であったと思う）男が紀州白浜の旅先から愛する女に手紙を送る場面がある。男は西行の歌を引いて――波寄する白良の浜のからす貝、拾ひ易くも思ほゆる哉――と書いてやった。すると女は憤りと悲しみとを罩めた返事をしたためる。

（私を、拾い易い女と思われることは耐えられない）と。

拾い易い女、手を出せばすぐにも摑める女と思われることは、無節操な女と思われたことに等しい。要するに心に誇りを持たないということである。威武に屈し、富貴によって淫せられるということである。

小倉百人一首のなかに（春の夜の夢ばかりなる手枕に、かひなく立たん名こそ惜しけれ）という歌がある。私はこの心こそ女性の誇りでなくてはならないと思う。下の句の、凛乎としてみずからを高く持する態度は見事なものだ。拾い易いものはまた捨て易くもある。拾い難い心こそまた捨て難き心である。

戦後の日本を支配しているものは物質の威力である。金銭と物質との力である。生きて行くための経済に追われる現状に在って、多くの人はその心の誇りを失ったように見える。しかしながら物質の窮乏によって心の誇りを失うことは、心が物質に敗北したことである。

昔の諺に「武士は食わねど高楊子」と言った。これは単なるやせ我慢ではない。武士としての心の誇りを失わぬための大事な誡めである。経済上の混乱はやがて改められ、安定した生活が遠からず来るに違いない。それまでのあいだ吾々は物質的には苦しい思いをしなければなるまいが、生活が安定したときになって、吾々の心が誇りを失い、荒れすさび、美しさもうるおいも無くしていたならば、これは敗戦にまさる惨澹たるものだ。経済の安定する日まで、私たちは自分の心の誇りや、心の美しさを失わないように正しく維持していなければならないのだ。

ダンディという言葉がある。一種の洒落者であるが、そのお洒落は外面を飾ると同時に、一層

多く心の中を飾るのである。その飾りは虚飾ではなくて、心の誇りを維持することである。冒し難い心の高さを誇るのである。一糸乱れぬ服装を身につけることによって風俗の下賤から身をまもり、高い教養を身につけることによって低俗さと愚劣さとから遠ざかろうとする。私は今日の日本に、ダンディの精神がほしいと思う。

都会に於ける女性の風俗は日々に華美を加えて来たが、それは外面だけの虚飾にすぎないであろうか、それとも心の高さをも同時に加えて来たものであろうか。外面を華やかに装うと同時に、心の中は（拾ひ易くも思ほゆる哉）という風な崩れ方をしてはいないだろうか。華やかに装うことが媚びることであり、人目をひくことであり、曳く手を待つことであり（さそふ水あらばいなんとぞ思ふ）ことであるならば、その服装は身売りの看板にひとしいものになる。よそおいは高き心の表現であってもらいたい。

憲法と民法とが新たになり、女性の自由は保証されることになった。その自由が、低俗さへの自由、頽廃への自由、無節操への自由であるならば、新憲法は女性を亡ぼすものになるであろう。それは是非とも節操への自由であり、強権を拒むことの自由であり、みずから高き心を持することの自由でなくてはならない。冒頭に引いたパアル・バック女史の小説にあるように、低俗さに妥協しない事の自由、自分の高き心を確保することの自由でなくてはならないのだ。このように解釈してこそはじめて、女性の自由は貴重であり、女性の将来に洋々たる希望をかけることができるのだ。

（昭和二十二年十一月）

宗教と共産主義に関して

宗教について、私はキリスト教の一端を知っているに過ぎない。共産主義については、日本共産党の活動の一部分を知っているだけである。この二つの共通点は、「信者」をもっているということである。

私は人間を二分して、信仰人種と非信仰人種とに区別できるだろうと思う。そして宗教も共産主義も、信仰人種の生活領域に在る。基督教信者が共産党員になり、共産党員が基督教信者になった例は多い。信ずるという精神状態に於て相近似しているのだ。

高級なクリスチャンは教会の活動を信じていない。それと同様に高級な共産主義者は共産党を信じていない。

思想は、これを具体化すれば俗悪になる。（小説を映画化すれば俗悪になるのと同じだ）俗悪化を敢えてする理由は大衆に愛されんが為である。俗悪になって、しかも大衆に愛されない場合は、脚色が拙劣であると言わなければならない。

キリスト教は俗悪化して大衆に愛されたが、共産主義が俗悪化して日本共産党となっても大衆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton